

復刊にあたって

社会福祉法人太陽の家

理事長 中村太郎

私は1960年に大分県別府市で生まれた。父である中村裕が、英国留学から帰国した1か月後のことだ。記憶には残っていないが当時の写真によると、3歳のときにパラリンピックの産みの親であるグットマン博士に会っている。その頃から、障がいを持った人たちがあたりまえのようにわが家に入出入りして、障がい者との生活は私の日常であった。

太陽の家は、今年創設から46年目を迎えた。共同出資会社は、1995年に富士通カスタム太陽(現・富士通エフサス太陽)が加わり8社となった。別府、愛知、京都にある太陽の家全体では、1000人を超える障がい者が働いており、そのうち約6割が雇用労働者となっている。また、今では身体障がい者だけでなく、知的障がい者や精神障がい者も一緒に働いている。大分県が主催している大分国際車いすマラソン大会も、昨年第30回記念大会が開催され、父の薨じた障がい者の自立とスポーツ振興の種は着実に育っている。

障がい者には「保護より働く機会を！」と唱えた父の理想は、40年経って漸く障害者自立支援法という制度になった。他方、太陽の家関連企業が先導的な役割を果たしたことにより、障がい者が働く環境も次第に整備され、数多くの障がい者が社会福祉施設だけでなく一般の企業でも働けるようになった。また、国連の障害者権利条約の制定もあり、障がい者のQOL(生活の質)改善の環境は着実に整えられつつある。

私は、2006年に畑田和男先生はただかずおから太陽の家の理事長を引き継いだ。障がい者支援の法制度や環境が大きく変わるなか、太陽の家の目指す方向として「ソーシャルインクルージョン」と「コレクティブタウン構想」を掲げている。ソーシャルインクルージョンとは、従来、障がい者が、経済的、社会的に自立し自由に暮らせるように支援してきた活動を、高齢者、働く女性、外国人、刑余者などのいわゆる社会的弱者といわれる人たち全体に広げ、社会から阻害されることがないように支援する活動である。また、北欧の街には、今の日本のように、障がい者や高齢者がそれぞれの専用住宅に住むのではなく、障がい者や高齢者が、育児に励む若年夫婦などと共に生活する建物、コレクティブハウスというものがある。この形態を、ひとつの建物だけでなく「街」全体にまで広め、障がい者、高齢者、若者、外国人などが共に働いて暮らす、多様性のある「街」空間を実現することが、コレクティブタウン構想である。私の生まれ育った別府市には、立命館アジア太平洋大学りつめいがんという全学生の半数を外国人が占める大学がある。英語と日本語で授業を行い、グローバル化に対応する企業から卒業生はひっぱりだこといわれている。別府市は外国人学生の人口密度が日本一であり、統計はないと思うが障がい者の人口密度もかなり高いはずである。この街が、障がいの有無や肌の色にかかわらず、老若男女の集う「共生社会」、つまりコレクティブタウンとなるように力を尽くしたい。

父は、整形外科医として障がい者医療を行うだけでなく、太陽の家をつくって障がい者の仕事を確保し、自立の手伝いをした。目標を掲げ、それを実現するための計画を立て実行した。まねのできない偉大な業績だ。1984年に57歳でこの世を去ったが、私もその年齢に近づいている。父がそうであったように、太陽の光を浴びて、私も轍なだのない荒野を切り開いて行こうと思う。

(2011年3月31日)